

社会学

◇教員◇

教授：武川正吾、佐藤健二、白波瀬佐和子

准教授：赤川学、出口剛司、祐成保志、井口高志

助教：武岡暢

◇学生◇

学部：110名、修士課程：15名、博士課程：24名

(1) 研究室

銀杏並木に面した法文2号館の1階に社会学の研究室がある。地階にはコピー・センター、アーケード側を出ると学部事務室や生協が近く、地の利はすこぶるよい。中は4つのブロックに分かれていて、その一つが学部生用の読書室になっている。初夏にはまばゆい緑、晩秋にはあざやかな黄が窓の外をかざる。壁の書架に並んでいる古くからの図書の背表紙が部屋をとり囲み、まん中は、大きなテーブルが主のように占拠している。雑然とした賑やかさは、多様な研究領域をかかえる社会学を象徴しているのかもしれない。いかにも往時の学生の勉強部屋といった感じのこの部屋は、昔から学生同士のさまざまなコミュニケーションの広場として活用されてきており、学部生による自主的な研究会や勉強会が頻繁に開かれている。情報基盤センターの端末をはじめ、ネットワーク・コミュニケーションも盛んになっている。

文学部最大の200名近くもの学生・院生をかかえる社会学にとって、研究室は貴重な共同空間であり、外国語図書、雑誌、資料が置かれているほか、事務連絡、教材とゼミ報告資料のコピー、端末操作、情報交換など、さまざまな活動の結節点となっている。この共同研究室を中心にして、その周辺（同一階、地階、向かいの法文1号館4階）にいくつかの実習室、機器室、そして教員室が存在する。

社会という現象は悠久の昔から現在にいたるまで、人間の生活するすべての空間において存在してきた。かつて、社会学という学問が19世紀西欧社会において台頭してきた時代、コントやスペンサーやマルクスは、「近

代社会とはなにか」という問いに答えようとする営為のなかで、包括的で一般的な総合的社会理論をめざした。さすがに今日では、かれらの理論がそのまま保持される状況にはない。しかも、通常 of 社会学研究の営みは、より特定の限定された対象領域におのずから専門分化せざるをえなくなっている。とはいえ、社会学は今でもそうした個々の経験的研究を通じてつねに「社会とはなにか」「社会と個人とのよりよい関係はどういうものか」という基本問題への現実的な関心に貫かれている。建物は古いけれども、研究室の中はそうしたいつまでも若々しいテーマが息づいている。

(2) 授業

現代において社会学の研究領域は、家族、組織、農村、都市、国家、国民社会、国際社会という社会集団の類型による区分、教育、社会福祉・医療、政治、法、経済、社会階層、産業・労働、社会運動、社会思想、社会意識、という現象の特性に基づく区分などによって個別的に分かれている。さらにまた、ミクロ自我論、行為論、マクロ・システム論、歴史社会学、社会変動論、研究法として計量社会学、社会調査法などの領域も存在する。その中で東大文学部の社会学は、つぎの領域を中心として教育・研究体制の充実を推進してきた。それは、学説、理論、階層、公共性、福祉、社会政策、科学、技術、環境、リスク、文化、社会意識、家族、ジェンダー、人口、セクシュアリティ、コミュニティ、社会問題、臨床などである。さらに大学院韓国朝鮮文化研究専攻から文化人類学の分野で一名の教員に2003年度からご参加していただき、2018度からは福祉社会学の分野でさらに一名が加わった。また2011年度から国際援助の分野が、2013年度から文化政策の分野が、文化資源学研究専攻の教員の協力で選択肢に加わった。学生はこれらの中から、授業や読書や研究会を通じて、自分自身の特定化された問題関心を醸成させていくことになる。既存の研究や資料がしっかりと踏まえられているのであれば、発見的で斬新な課題に挑戦することもできる。

演習は3年生と4年生が一緒に、あるテーマにそって個人ないしグループで発表をしたり、文献を読んで討論したりするタイプのものが多い。かならず一つの演習に主ゼミとして参加するほか、熱意があればもう一つを副ゼミとして参加することもできる。それぞれの演習のテーマは多少広めに設定されるので、どの演習でもある範囲内で各人の関心に沿って積極的

に参加することができる。

必修ではないが、「調査実習」や実習をともなう授業も設けられており、どこかの町や村に（しばしば泊りがけで）出かけて、質問紙調査やインタビュー調査を行なう。帰ったあとは、コーディングの共同作業やパソコンによる分析の仕事が待っているけれども、「社会」を肌で感じる貴重な体験となる。また、4年生や院生も加わった研究室内の縦断的な協同事業である点も意義深い。

学生数の多い社会学専修では、一人一人が自立した目的意識をもって研究室に参加することが期待されている。その意味で、卒業論文を執筆すること、またそれにむけて探求し続けることが最も重要視される。卒業後の進路のいかに拘わりなく、人生とは自分で課題を見つけ自分で解いていくという試行錯誤の連続であるはずで、卒業論文はそうした態度の形成のために文学部が用意している最大の学習機会であるといえる。社会学の卒業論文は原稿用紙に換算して200枚を標準としており、自ら設定した問題領域に関する参考文献を読破してテーマを掘り下げ、資料やデータを収集・分析し、新しい発見を説得的に語らなければならない。その過程では、主として所属する演習の教員による指導と助言を受けることになるが、基本的には一人一人の学生の個人的な研究活動である。

（3）教員たち

武川教授： 社会政策・社会計画論を専攻。「計画・福祉」の領域を担当。現在、社会計画を社会政策の計画化としてとらえたうえで、社会政策論を社会学の立場から再（脱？！）構築することをめざしている。また、福祉国家を基軸に据えたマクロ社会学的な現代社会論の研究にも取り組んでいる。著書は、『地域社会計画と住民生活』（1992）、『社会政策のなかの現代』（1999）、『連帯と承認』（2007）など。演習は社会問題と社会政策を中心テーマにしながらか基本文献の講読と学生諸君の個人研究発表を中心に運営している。前半は、社会学の「基礎体力」をつけるため社会学全般の基礎文献の講読も行っている（www.l.u-tokyo.ac.jp/~takegawa）。

佐藤教授： 文化・社会意識および歴史社会学の分野で研究している。日本における〈近代〉の相対的な把握がテーマだが、データ資料の具体性からいかに社会学的な想像力をたちあげるか。理論に対する感性や理解力だけでなく、素材を理論の対象にまできたえあげる方法的な構想力も大事

だと考えている。卒業論文も、そのような点での実証性が要求される。著書に『読書空間の近代』（1987）、『風景の生産・風景の解放』（1994）、『流言蜚語』（1995）、『歴史社会学の作法』（2002）、『社会調査史のリテラシー』（2011）、『ケータイ化する日本語』（2012）、『論文の書きかた』（2014）、『柳田国男の歴史社会学』（2015）がある。学部での演習は、社会意識論・メディア論・文化分析の基礎文献の課題を課す一方で、それぞれの参加者の独自のレポート発表にもとづく討論を重視したいと思う。

白波瀬教授： 人口社会学、比較社会階層論、社会調査法を専門とする。特に、人口・世帯変動における格差・不平等に関する計量的分析アプローチを用いた国際比較研究に取り組んでいる。また、生活保障の公・私の役割分担についても研究し、少子高齢社会における社会保障と家族との関係について比較福祉国家論の枠組みから検討を試みている。社会のありよう、社会の問題をテーマとする社会学は一見親しみやすい反面、誰でも簡単に社会学者になれるような誤解も与えやすい。そこで、社会科学の一つとしての社会学を専門とし、社会学的ものの見方を身につけることが重要になる。演習では、基本文献を読み議論しながら、自らの研究テーマを立てていく。積極的に議論に参加し、自ら進んで研究に取り組むことが期待される。

赤川准教授： 社会問題の社会学、セクシュアリティ・ジェンダー論、言説の歴史社会学、人口減少社会論などが専門だが、「社会調査のなんでも屋」を目指している。『セクシュアリティの歴史社会学』（1999）、『明治の「性典」を作った男』（2014）で取り組んだ作業をライフワークとしつつ、『子どもが減って何が悪いか！』（2004）、『これが答えだ！少子化問題』（2017）、『少子化問題の社会学』（2018）で行ったリサーチ・リテラシー、質問紙調査に基づく計量的研究、マスメディアが発信する情報のテキストマイニング、人々の主観的意味世界を掘り下げる聞き取り調査（生活史）なども幅広く行う予定である。演習参加者に関しては、理論だけでなく、具体的な社会問題を経験的に探求することを必須条件とする。このさい社会問題が構築される際に使われる「統計」の批判、社会問題を語る人々がもつ「理念」対立の構図と、社会問題が構築される「歴史」的過程を踏まえることを、三つの柱とする。参加者一人一人の問題設定が、討論の過程で相乗的に発展していくことを期待したい。

出口准教授： 社会学理論、社会学史研究を専門とする。主としてフラ

ンクフルト学派の批判的社会理論を中心にコミュニケーション論、承認論、批判的文化研究に取り組んでいる。社会学の理論は、社会や人間存在の様々な側面を常識を裏切る形で多様に描き出すプリズムのような働きをもっている。そうした観点から、理論や理論史の検討を通して現実社会を批判的に分析し構想するポテンシャルをくみ出すことを課題としている。「社会的存在」を研究対象としてきた社会学は、他の人文社会科学とも深い関連性を持ちながら、人間存在の意味や人と人との「つながり」に強い関心を向けてきた。そこで演習では社会学理論を学びながらも、とくにコミュニケーション論、相互行為論、社会的自己論に関する具体的テーマを重視したい。また各自が選び取ったテーマに即した研究報告とディスカッションを取り入れ、社会的な思考、表現、討論の力を身につけることをめざす。

祐成准教授： 専門はコミュニティと住まいの社会学である。コミュニティ研究は社会学のなかでも伝統ある分野の一つであるが、従来は地域社会とそこで活動する集団に焦点をあてた研究が中心であった。現在、コミュニティをめぐるのは、地理的な近接性や境界線の揺らぎが指摘される一方、心身の安全を保障する居場所の必要性が論じられる。こうした状況を踏まえつつ、これまでの蓄積を批判的に継承しながら、コミュニティ研究の方法を再構成することが目下の課題である。生活構造の土台であると同時に社会制度の結節点でもある「住まい」（ハウジング／ホーム）という場への着目は、その際に有力な手がかりとなると考えている。住まいの社会学は未開拓部分の多い領域である。詳しくは著書『〈住宅〉の歴史社会学』（2008）を参照されたい。演習は、理論的関心と実証的方法、「量的」手法と「質的」手法、歴史的資料と現代的現象の間を自在に行き来しうる柔軟な研究態度の獲得を目標としている。

井口准教授： ケア・支援の社会学、医療社会学、臨床社会学などを専門とする。研究の出発点として、家族介護を中心に、介護・ケアという行為の特性と、それに対する社会的支援のあり方を、インタビュー調査などの質的方法を通じて明らかにすることに取り組んできた。その後、特に認知症（dementia）という現象に注目するようになり、現在は、介護・ケアの領域を含みつつ、それを超えた認知症の排除や包摂の問題、病いや障害の語り、当事者との共同、認知症概念の日常生活への効果などの課題に取り組んでいる。以上の研究プロセスの一端は『認知症家族介護を生きる』を参照して欲しい。また、ケア・介護研究を足場に、より実践志向の強い

社会政策・社会福祉や看護学の研究者、血友病・薬害 HIV の当事者などとの共同研究にも取り組んできた。そうした試みの中での社会学のスタンスや発信のあり方を考えていくことも課題とする。演習では、現場の具体的な課題と社会学理論や方法との接点を考えることを中心に、購読や各自の具体的なテーマの探求を行う。

(4) 進路

卒業後の進路で、まず伝統的に多いのが、新聞、放送、出版、広告などのマスコミ関連企業への就職である。その他の民間企業では、情報、商社、金融、ほかに民間の研究リサーチ会社への就職も少なくなく、メーカーへの就職も見受けられる。国の省庁や都庁など地方自治体の公務員の道を選ぶ者も毎年数人いる。研究者を志す人は、年によって異なるが、5人～10程度あり、社会学の大学院へは7人前後、その他の大学院（他専攻、他研究科、他大学など）にも5人程度進学している。いうまでもなく進路状況は学生個々人の志望に依存するので、毎年、多少変動する。

大学院へ進学する場合を除けば、現代日本の企業社会では、社会学で何をどの程度勉強したかは進路先にあまり影響しないかも知れない。社会学という学問それ自体は、必ずしもビジネスマンやマスコミ関係者を養成することを目的とするものではない。むしろそうした産業社会の直接的な諸目的からは一步距離をとって、しかも対象とする社会現象を経験科学的に考察するというところに、経済学や法学でもなく、また哲学や文学でもない、社会学らしさがあるともいえる。そして、20歳台前半の2年間にこうした社会学的視点を経験することは、どんな進路を歩むにしても、一人一人のその後の人生にとって貴重な財産となるだろう。

なお、社会学専修では、全員が共通に受講する必修科目として「社会学概論」「社会学史概説」および「社会調査」（それぞれ4単位）の3つがあり、このうち「概論」と「調査」は2年次のAセメスターに開講される。さらに、「社会学演習」を8単位以上、「社会学特殊講義」の中から12単位以上を履修しなければならない。ほかに、卒業論文12単位、他の専修課程の授業、共通科目、他学部の授業などを含め、合計で76単位を取得することが卒業の要件となっている。